ディキンスンの“‘Arcturus’ is his other name—”一つの読み

——楽園回復のモティーフ——

萱　嶋　八　郎

1

この小論は，エミリ・ディキンスンの No. 70 の詩— “‘Arcturus’ is his other name—”[(1)] を，人間の内面の成長の一つの過程・精神的成熟の一断面を描いた詩であることを論証しようとするものである。またその前提のもとに，論証にあたり，分析心理学・文化人類学・神話研究等の成果を幾分か利用するものである。

この詩の中では，前半の1～4節の中で，少女である「私」(“I”) は，「科学」(“science”) に対して，強い嫌悪感を示している。また最後の7・8節では，「私」が「天のみ国」(“the Kingdom of Heaven”) に入ることが述べられている。一見するところでは，最初の4節と最後の2節の間には一貫した論理の展開が見つからない。「科学」の口出しを嫌った少女が，何故天国に入ることが出来たのか。この詩には物語性があるが，そのストーリーの展開に合理的な説明がつかないのである。つまり前半と結末がバラバラであるとの印象を与える。従来の研究書では前半の16行に触れるか，最後の8行に触れるかである。例えば，Adalaide Morris は「一息で雄蘂の数を数え上げる」(“Computes the stamans in a breath—”) 科学者の姿に家父長的な父親像を見る[(2)]。逆に Karl Keller は詩人は，「いたずら好き」(“naughty”) な少女の役を演じて，神からの憐れみと同情を求める女性の役割を演じ，「流行遅れの服を着て」(“old fashioned”) と「いたずら好き」(“naughty”) の語を並置することで，自らを道化としていると見る[(3)]。Jane Donahue Eberwein は，この詩の中では，天国が奇妙にも地上を追われた淋しい子供の避難所でねり，詩人は天国の無邪気な幻に，しがみついていると考える[(4)]。Anand Rao Thota は，詩人の心の中の宗教と科学の葛藤と見る[(5)]。前半の16行では「私」は，「科学」に対して，嫌悪を示す。しかしそれは必ずしも，宗教との対立とは言えない。仮に前半がそうであると認めても，最後の8行で科学と宗教の葛藤がどのように止揚されたのか，説明がつかない。これらの研究家はいずれも断片的に No. 70 に触れるだけで，No. 70 の詩の全体を眺め，その流れを見通して，論じたものが少ない。E. Miller Budick は，珍しくこの詩

全体を見渡して論じている。彼は「私」（詩人）も，科学者も共に自然を個別化し，引下げ，断片化し，損なっていることで，同罪であり，そこで「私」は，父なる神に許しを乞い，天国に入れて貰えるよう祈っていると考える[6]。問題は詩人は，自らを「いたずら好き」とは考えているが，果たしてそのことに罪を感じているのかである。「私」が「虫」（“a worm”）を殺し，「花」（“a flower”）を摘んだとしても，無垢な「私」がそれに罪を感じているとは見えない。奇妙なことに前半の4節と，最後の2節をつなぐ第5・6節に，今まで触れた研究者がないことである。この第5・6節は，前半から結論へと話をつなぐのに重要な個所であるので，この小論では，この箇所にも触れることで，No. 70 の詩全体がどのように展開したのか，その解明を試みるものである。

2

最初にこの No. 70 の詩の前文を掲げる。

「北斗星」が彼の別名です。
私はむしろ彼を“お星様”とお呼びしたい。
わざわざ余計な口出しをするのが
科学のやり方です！

私は先日虫さんを殺しました。
そばを通りかかった“学者先生”が，
呟きました。「われ甦らん」，「百足」！
「主よ，我々は何と脆いのでしょう」！

私がお花をひとつ引きちぎってきます。
すると虫眼鏡を持った怪物が，
一息で雄蘂の数を数え上げ，
彼女を“綱”（クラス）に分類します。

私は，以前は，お帽子で，
蝶々さんを捕まえました。
彼は，今では“標本箱”の中で，まっすぐ
座り，クローバーのお花を忘れました。

かっては“天国”であったものが，

今は“天頂”となっています。
時間の短い仮面舞踏会が終わったとき，
私が行こうと心持ちにしていた所もまた
地図に載せられ，海図に示されています。

もしも万が一にも南北両極が飛び跳ねて，
逆立ちしたとして，それが何でしょう！
どんな悪ふざけが起きたとしても，
私は“最悪”へ備えていると思います！

多分“天の御国”は変わったのでしょう。
私がそこに行った時，そこの“子供達”が
“新しい流行の服を着て”，
私を嘲笑し，見つめないようにと願います。

私はお空のお父様が，ご自分のかわいい
少女——流行遅れの服を着て，いたずら好き——
そのすべてを持ち上げて，“真珠”の
踏み越し段を越えさせて下さると思います。

“Arcturus” is his other name—
I'd rather call him “Star.”
It's very mean of Science
To go and interfere!

I slew a worm the other day—
A “Savan” passing by
Murmured “Resurgam”—“Centipede”!
“Oh Lord—how frail are we”!

I pull a flower from the woods—
A monster with a glass
Computes the stamens in a breath—
And has her in a “class”!

Whereas I took the Butterfly
Aforetime in my hat—
He sits erect in "Cabinets"—
The Clover bells forgot.

What once was "Heaven"
Is "*Zenith*" now—
Where I proposed to go
When Time's brief masquerade was done
Is mapped and charted too.

What if the poles sh'd frisk about
And stand upon their heads!
I hope I'm ready for "the worst"—
Whatever prank betides!

Perhaps the "Kingdom of Heaven's" changed—
I hope the "Children" there
Wont be "new fashioned" when I come—
And laugh at me—and stare—

I hope the Father in the skies
Will lift his little girl—
Old fashioned—naughty—everything—
Over the stile of "Pearl".

この詩を解く鍵は，最後の一行「真珠の踏み越し段を越える」("Over the stile of 'Pearl'.")であろう。この行は Capps が指摘しているように，新約聖書『ヨハネの黙示録』第21章21節の引喩である。[7] そうであれば，ここは楽園回復を述べたものである。このように考えたとき，この詩は第1～5節・1～21行は，楽園喪失，第6節・22～25行は終末と最後の審判，第7・8節・26～33行は，楽園回復を歌ったものと考えることが可能であろう。そう考えた時に，この詩の中に一貫した一つの物語の展開を見て取ることが出来るであろう。それは更に「楽園喪失と回復」に託して，人の精神の成長・成熟する過程を歌ったものと見ることができる。

ここで先ず「楽園」とは何かについて考えて見たい。「楽園」は旧約聖書では『創世記』第

2・3章に出てくる。「主なる神は東のかた，エデンに一つの園を設けて，その造った人をそこに置かれた。」（“And the Lord planted a garden in Eden; and there he put the man whom he had formed.”[8]）「エデン」（“Eden”）原意は「喜び」（“delight; pleasure”）であり，「園」（“garden”）の原意は「花・果樹・野菜の栽培のために垣根で囲われた土地」である。また「パラダイス」（“paradise”）は，新約聖書で三回用いられている言葉であるがその原意は囲いを作る，もしくは垣根で囲うことを意味し，転じてペルシャ王や貴族の庭園・果樹園を意味するようになった。更に『創世記』の2章の記事は，人が「エデンの園」で，動物に名を付けたことで，動物を支配し，同時に，動物と共存していたことを示す。旧約聖書の「楽園」のイメージはこのように垣根で囲まれた庭園で，そこには花や果樹や野菜が繁り，動物もいて，しかも人間と親和し，神は愛を以って人間を保護し，神と人，人と人，人と自然が調和し，共存した，柵によって囲われた世界である。分析心理学で言えばそれは一つの原型的イメージである[9]。『創世記』の「楽園」の物語は，人類の始祖が禁じられた善悪を知る木の実を，蛇に唆されて食べることで，「楽園」を追放されることで終わる。聖書は，人の死後及び時間の終わりに義人が天国に入ると言う。しかも新約聖書の最後の『ヨハネの黙示録』はこの世の終末と最後の審判・新天新地の到来・楽園の回復をもって終わる。天国のイメージは回復された楽園のイメージ[10]と新しいエルサレムという都市のイメージ[11]の二つに分かれる。しかしそのいずれにしても，そこは神と人，人と人，人と自然の調和が回復された世界である。

3

最初に先ず前半の4節を「楽園喪失」として検討してみたい。「“北斗星”が彼の別名です。私はむしろ“お星様”とお呼びしたい」（“‘Arcturus’ is his other name—/I'd rather call him ‘Star.’”）。詩の中の「私」はここで，星を北斗星とか，大熊座とかに分けることに強い嫌悪感を表現している。かつて R. W. エマスン（R. W. Emerson）は，その『自然論』（*Nature*）の中で次のように述べている。

> ……大気が透明に造られたのは，人間に天体のうちには，崇高なものが絶えず存在することを教えるためである，と考えてよい。都会の街上から見る星は，なんと偉大であろう。……星は見る者に畏敬の念を呼び起こす[12]。

ロマン主義者としてのエマスンが，星を見ることに求めたのは，星を牡牛座とか，白羊座とか，金星とか火星とか一つ一つの星を弁別し，区別することではなくて，子供のような無垢の心をもって素直に星の崇高さに，畏敬の念が呼び覚まされることである。No. 70 の詩の「私」は「お星様」（“Star”）と呼んでいた。それは大文字で書き出すことで，星は何々星と区別された星ではなくて，星一般であることを示す。更に「私」は星を「彼」（“he”, “him”）と人

称代名詞で指示する。星は死んだ物質ではなく，「私」の心に働き掛けて来る生きたものであった。以下，この詩では，花も蝶も人称代名詞で指示されている。この擬人化されることで，子供「私」にとって，「私」に語りかけ「私」と心を通わせる，「私」と共に生きる生命あるものであったことを表現している。「私」は幻想の・メルヘンの・無垢な子供の世界にいたのである。「わざわざ余計な口出しをするのが，／科学のやり方です！」（"It's very mean of Science/ To go and interfere!"）と「私」が叫ぶとき，「お星様」と「私」との調和の世界を破る科学に対する苦々しい気持ちが表明される。「楽園」の人類の始祖は，善悪を識別する木の実を食べることで，自然と調和・共存した世界から追放される。つまり善悪を識別する理性的能力の発達が，自然との調和を壊し，「楽園」からの追放を招いたのである。この詩では，「科学」（"Science"）で代表される，「北斗星」と他の星を識別するような識別する理性的能力の発達が子供の幻想と夢の世界を破壊する。このような主観と客観，理性と感性，意識と無意識の分離，「一体的現実」[13]が破れることが，子供の心に不安，動揺を引き起こし，その引き起こす原因となるものに反発と嫌悪を生じさせる。

第2節で「私は先日虫さんを殺しました」（"I slew a worm the other day—"）。その時，「そばを通りかかった"学者先生"」（"A 'Savan' passing by"）の口にした言葉は真に奇妙である。第一が「我甦らん」（"Resurgam"）である。この「学者先生」は"I shall rise again"と英語で言わず，厭味にも子供に向ってラテン語で"Resurgam"と学を衒う。これはラテン語新約聖書の『マタイによる福音書』27章63節のキリストの言葉である。従ってこの「学者先生」は聖職者であろう。しかし聖職者が何故殺された虫を見てこう言ったのであろうか。キリスト教の象徴体系の中で，虫の意味するものは大変複雑であるが13行目の「蝶」（"Butterfly"）が人の霊を表すのに対して，「虫」は人の体を表す。第1節の「星」がキリストの誕生の時に，東方の博士達を導いたのに対して，虫は人となった神の子イエス・キリストの体を表し，[14]その死と復活を表す。この「学者先生」は，理由もなく虫を殺している，無邪気だが残酷な「私」を見て，キリストの死と復活を思い起こしている。次にこの「学者先生」は「百足」（"Centipede"）と言う。ここでは再び「科学の余計な口出し」がある。「虫」は一匹一匹正確に識別され，分類されなければならない。子供は成長し，識別する理性を身につけねばならない。第3にこの「学者先生。は，「主よ，我々は何と脆いのでしょう」！（"Oh Lord—how frail are we"！）と言う。ここで言う「脆い」（"frail"）は身体的脆さと共に，道徳的弱さをも表す言葉である。ここで連想されるのは，ニュー・イングランド最大の神学者・伝道者であるジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards）（1703—58）である。彼の最も有名な説教は「怒れる神の御手の中の罪人」（"Sinners in the Hands of an Angry God"）（1741）である。その中でエドワーズは，怒った神の審判を受ける罪ある人々を，手の中で将に殺されようとしている虫に譬えて，地獄の恐怖を生々しく描写した。3番目の発言は，エドワーズの亜流の聖職者先生が，人間の身体的・道徳的弱さと神の審判とを，子供の心に思い起こさせようとしたもの

である。エドワーズに代表されるニューイングランドのピューリタンはカルヴィン主義を奉じていたが，彼らはその信仰の基本を聖書の知的理解に置いた。エドワーズ自身が「蜘蛛」や「虹」等の科学的観察記録を残す科学者的資質の豊かな人物であると共に，神の絶対的主権を説いて人間の意志の自由を論ずる大著を残した神学者でもあった。ピューリタンの宗教教育は科学と並んで，またはそれ以上に人を知的に訓練するものでもあった。そしてその既成のピューリタン教会に対して「私」は激しく嫌悪の念を表す。第2節では単に科学的な虫の分類だけでなく，無邪気な，しかし残酷な子供の虫を殺す行為に対して，宗教的・倫理的な教訓が加えられる。

第3節でも子供の残酷さは続く。「私が森でお花を引きちぎってきます」("I pull a flower the woods—")。しかしそれは無垢な子供の戯れでもある。「虫眼鏡を持った怪物が，一息で雄蘂の数を数え上げて，彼女を綱（クラス）に分類する」("A monster with a glass/ Computes the stamens in a breath—/And has in a 'class'!")。「怪物」("a monster") の「学者先生」にとって，「花」は美しさで感動するものでもなければ，生命あるものとして，愛しく思うものでもない。それは拡大鏡でもって，どの綱（クラス）に分類するかだけが問題である。「虫眼鏡」("a glass") の冷たいガラスは，そのまま「怪物」の拡大された冷たい理性を表す。拡大された意識を表す。「私」にとって「お花」は「彼女」と女性代名詞で呼べる，生きた親しい友人であった。しかし拡大した理性を持った「怪物」にとって，それは「雄蘂」の数を数え，「綱（クラス）」に分類する，知的な識別力の対象である。「一息で数え上げる」("Computes... in a breath—") とその数え方が速くて，数えることに馴れていることは，この「怪物」の理性が拡大していることの今一つの証拠である。そしてそれだけ，「私」を不安にし，嫌悪の念を起こさせている。

第4節で，「私は，以前は，お帽子で，蝶々さんを捕まえました」("... I took the Butterfly /Aforetime in my hat—")。子供が戯れに蝶々を追って帽子で捕える姿は，「楽園」の無垢な姿を連想させる。「虫」が人の体を表すなら，「蝶」("Butterfly") は「霊」を表す。人の知性を換喩的に頭で表すとすれば，帽子は更に換喩的に頭を表す。「蝶」を「帽子」で捕えることは，生きて自由に空に舞う，天上の霊の働きを，子供が直観的に理解することを表している。かつて，「楽園」ではそうであった。今「学者先生」である「怪物」の，その死んだ知的活動の結果，生きた霊は自由に飛翔することを禁じられ，暗い無意識を表す「標本箱」("Cabinets") の中に閉じ込められている。それは死んでまっすぐ座っており，冷たい理性を表すガラスを通して見ることが許されるだけである。「蝶」は春を表し，新しく再生した生命を表す「クローバー」("The Clover") から，生命力を得ていた。今はそれもすっかり忘れている。生きた霊がその生命を失っている。

作者は，「星」「虫」「花」「蝶」と子供の世界で親しいものを無造作に選んで並べたように見える。しかし，天上の霊的なものを表す「星」と「蝶」に対し，地上の具象的なものを表

す「虫」と「花」，女性を表す「花」に男性を表す「蝶」，天上の美を表す「星」に地上の美を表す「花」，霊の世界の自由な活動を表す「蝶」に霊の世界の道しるべの「星」など，作者は入念に選んだ4つの具体的な代表例を布置することで，至福な「楽園」で遊ぶ無心な子供の心の世界を表現すると共に，意識が拡大し，知性が発達するにつれて，「楽園」の調和がどのように破壊されるかを科学と科学者・聖職者の姿を借りて描いている。それは子供の心の中に強い動揺・不安・嫌悪・反発・苛立ちを引き起こすものであることを描き出す。

1～16行を幼児の心の一体的現実の崩壊と見ることは上述のように可能である。しかしこの詩は更に別の意味を重ねて持っていると読むことは可能である。この詩の作者が女性であり，「私」が少女の形を取っていることから，C．G．ユングの夫人，エマ・ユング（Emma Jung）の次の言葉が思い出される。「今日の女性の問題は……意識の拡大，あらゆる領域での一層の意識性[15]」である。女性は「意識的になることに対し，しばしば非常に抵抗する[16]」。E．ユングが「今日の女性の問題」と言ったのは勿論20世紀の女性の問題である。20世紀の女性に対する教育の普及と女性の社会における役割の変化が，女性の精神と人格形成に及ぼす影響についての問題である。しかしディキンンスンが，この問題を19世紀に，詩人として，時代に先取りして感じていたと考えられるのである。またE．ユングは，この意識化が「外から」現れてくる，「父や，父の立場に立つ男性」，「教師，兄，夫，男友達」，「精神的なものについての客観的な記録，教会ゃ国家，社会とその制度，科学と芸術の創造」といったものの姿を取って現れると述べている[17]。そしてこのことが1～16行で科学及び科学者，聖職者と言った姿で典型的に現れていると考えることが許されるであろう。

4

第5節において，「私」の心は過去から現在と未来へと方向が変更される。「かつては天国であったものが，今は“天頂”です」（“What once was ‘Heaven’ ／Is ‘*Zenith*’ now—”）「楽園」が過去において，地上に存在していたのに対して，「天国」（“Heaven”）は未来で天上に関わっている。“Heaven”は原義で空を意味し，同時に神の在したもう場所であることから，換喩として神を表し，死後に義人が行くことを許される至高・至福の未来の楽園をも意味する。それはアングロサクソン系の言葉で，語る者の感情を表現するのに適している。子供である「私」に親しい，違和感のない言葉である。「時間の短い仮面舞踏会が終わった時」（“When Time’s brief masquerade was done”）に「私が行こうと心持ちしていた所」（“where I proposed to go”）である。堕落以前の「楽園」では，神と人との間の分離はない。従って「楽園」から神の在す天国への隔たりはない。人は地上の楽園から天上の神の国へ直結していた，否，神と人とは共存していたのである。“*Zenith*”は，空の頂上の一点を指す言葉であるが，転じて天頂に至る道筋の意味もある。「楽園」と「天国」の間には，道が介在することになったのであり，隔たりが生じたのである。“*Zenith*”はアラビヤ起源のラテン系の言

葉であり，知的な学問語ではあるが，子供の感情には違和感のある，よそよそしい響きがある，心理的な隔たりを表す言葉である。"*Zenith*" には神または神の在したもう場所という意味はない。堕落以後の人には，神と神の在したもう所は直接的には知ることのできない，見失われたものである。「時間の短い仮面舞踏会」は人の一生と同時に人類の歴史をも示す。それは飲み食い，舞い踊る歓喜の時であるが，仮面を被った偽りの時でもある。短い一時的なものであって，天国の永遠とは比較にならない短い時である。「私」は，死後であれ，歴史の終末であれ，直ちに「天国」に行くことが出来ると心待ちにしていたのが，今は天国に至る道が「地図に載せられ，海図に示されている」("Is mapped and charted too·")ほどに遠くなっている。「私」にとって，「楽園」から「天国」への距離は，「地図」や「海図」に示されるほどに客観化し，隔てられて，距離が出来てしまっているのである。「地図」と「海図」は地形を識別するためのものである。「天頂」，「地図」，「海図」で示された科学的な物を識別する知的な能力の拡大，それは「星」，「虫」，「花」，「蝶」を識別する能力の拡大と共に，地上の「楽園」から，「私」を追っただけでなく，未来の「天国」からも「私」を追放したのである。人類の始祖が善悪を識別する力を得ることで，「楽園」から追われ，永遠の生命を得られる生命の木に至る道を閉ざされた[18]ように，「私」は知的な識別する力を拡大することで，即ち意識の拡大によって「楽園」を喪失すると共に，永遠の生命が与えられる「天国」からも隔てられてしまったのである。それは幼児の精神の成長過程であると共に，前述のE．ユングの述べた今日の女性の直面している不安の問題でもある。

第5節が，「楽園」の喪失と「天国」への道が閉ざされたことを歌ったものであるとするならば，第6節は終末と最後の審判となる。聖書の終末と最後の審判のイメージは予型としてはノアの箱船であり，未来の出来事としては天から火が降ってくることである[19]。いずれにしても共通しているのは，世界全体の破滅と，個人・人類の死と義人の再生・「楽園の回復」である。第5節にはこの二つの事が明示されていないが，22・23行の「もしも万が一にも，南北両極が飛び跳ねて，逆立ちしたとしても，それが何でしょう」("What if the poles sh'd frisk about／And stand upon their heads!)は，世界の破滅と宇宙的な変動を暗示する。それと共に，その災難の時にも，「私」には「それが何でしょう」と言い切る心の備えが出来たことを暗示する。また「私は"最悪"へ備えていると思います」("I hope I'm ready for 'the worst'—")と言うとき，世界の破滅に伴う「最悪」の事態である「私」個人の審判と死を暗示している。「南北両極が飛び跳ねて，逆立ちし」，「悪ふざけが起こる」("prank betides!")と言う，いささか戯れた言い方に，それとは裏腹な「私」の不安を覗かせている。しかしそれにもかかわらず，「私」には死と最後の審判への備えが出来たことを示す。それがどのようにして，その備えが出来たかは「私」は明示しない。しかし最後の2節に見られる「お空のお父様」との信頼関係の回復が幾分かそれを暗示する。

第7・8節は「私」が再生して，「天の御国」("the Kingdom of Heaven")へ入ること，

即ち「楽園の回復」を歌ったものである。「天国」のことを“the Kingdom of Heaven”というのは『マタイによる福音書』特有の言い方である[20]が26行で「多分“天の御国”は変わったのでしょう」(“Perhaps the ‘Kingdom of Heaven's’ changed—”)と言うときに，その変化は「私」の心の中で，漠然とした「神のいる国」とか「至福」の世界と言ったいメージから，キリスト教の聖書に言及された，特定の，そしてより具体的な「天の御国」への変化を指すものであろう。「そこの“子供達”が“新しい流行の服を着て”」いるとは，何を指すのであろうか。『ヨハネの黙示録』によると天の国に入れる者は，全て「白い衣」を着ている[21]。そしてその白い衣はキリストの贖罪死を信じる信仰を表す。即ちキリストの贖罪死を信じた者だけが天の御国に入る事を許される。『マタイによる福音書』22章1～14節の中で，キリストの天国の例話が語られているが，その中で天国は王の催す結婚式で，そこに「礼服」(“a wedding garment”)を着ていない客は，婚礼の式から締め出されたと記されている。当時の中近東の習慣では，王に会う時は，王から貸与された礼服を着る慣例があり，その客は王の貸与される礼服を着用することを拒否したため，式場から追い出されたのである。このことは，神の定めない方法で，即ちキリストの贖罪死を信じる信仰によらないでは，天国に入ることは許されないとされてきた。「私」が「天の御国」にいる「子供達」は，「新しい流行の服を着て」いると言うとき，「私」が伝統的なピューリタン・カルヴィニズムの教会に対して，アイロニーを浴びせかけていることは明白である。天国で着ている服は一様で，新しい服である——実は古い教えであると。“Children”と引用符付で言うとき，それは信者を神の子供とされた者たちという，伝統的な意味を含ませているのであろうが，ここでは子供である「私」の純真さ，無垢に対比して，子供の持つ付和雷同性，浅薄さ，未熟さ，異質なものに対する残酷さを風刺したものでもあろう。そして「私を嘲笑し，見つめないよう願います」(“And laugh at me—and stare—”)は既成教会員の伝統的な教義を画一的に遵守し，それに加わらぬ者に対する残酷さを暗示している。しかしそれに対して批判ではなくて，穏やかな皮肉や風刺に止めているところに，そのような既成教会をも許容する「私」の精神の成熟と寛容さを示している。

最後の節で，「私」の精神が変化し，成熟したことが再び示される。「私はお空のお星様がご自分のかわいい／少女——流行遅れの服を着て，いたずら好きで——／そのすべてを，持ち上げて…くださるものと思います。」(“I hope the Father in the skies／Will lift girl／Old fashioned—naughty—everything—／”)と言うとき，前半で細かいことにまで余計な口出しをする，怪物の科学・科学者・聖職者で表現された心の中の権威的で冷たい父親像が，宇宙の変動と歴史の終末・審判を経た後に，「私」には「私」の全てを受け入れてくれる寛大で優しい，助力を喜んで与えてくれる父親像に変化している。この父親に対して，「私」が「かわいい少女」であることは，「科学」——「意識の拡大」に伴った不安・苛立ちが消失し，心の調和が回復したことを示している。「天国」との間に隔たりを置いた悪しき父親像である「怪物」と異なり，「お空のお父様」は，「私」を持ち上げ，「私」を「天の御国」に入れてくれる。そ

れは父親との完全な信頼関係の回復を示している。「私」は「いたずら好き」で，「流行遅れの服を着」たそのままで天国に入ることが許される。作者は，前の時代の，N. ホーソン (N. Hawthorn) やH. メルヴィル (H. Melville) の持つ，そして伝統的なピューリタニズムの持つ，人間の本性に潜む罪深さに対する理解を欠いていたため，その作品に何か深刻なものが欠いていることは否めない。しかしそれは別として，「私」は自らの欠点・不足したものが，それはそのままで，自らに受け入れ，自らの人格の中に統合することに成功した。また「流行遅れの服を着」たままであるから，伝統的なキリストの贖罪死を受け入れぬままに天国に入れると確信したのである。

最後の行，「"真珠" の踏み越し段を越えさせてくださる」 ("Over the stile of 'Pearl'.) と「私」は「楽園」の回復を祈っている。終末に出現する天国については，聖書には前述のように二つのイメージがある。一つは『ヨハネの黙示録』21・22章に見られる城壁に囲まれた都市，新しいエルサレムである。今一つは『イザヤ書』11章6～9節等に見られる牧歌的なエデンの園の再現である。"stile" は，牧場の柵にとりつけられた，人は乗り越えられるが，動物は越えられない踏み段である。このことは，この園の中に動物がおり，動物を養う緑の植物が繁っており，生命の水が流れていることを暗示する。それはまた，この天国は動物——「人間の本能的なもの」を柵で包み込んだ，エデンの園の回復であることがわかる。それは園として，柵で囲いこまれたことで，秩序ある自然を表す。それはそのまま意識が，再統合されたことを示す。また柵で囲まれた牧場は，壁で囲まれた都市の始まりである。その意味で，城壁で囲まれた都市と柵で囲まれた園は互いに矛盾するものではない。城壁で囲まれた都市は完成された女性を示すが，柵で囲まれた園はその始まりでもある。地図や海図で示されるほど遠かった天国が柵一つ乗り越えれば入れる程近くにある。聖書の中の天国は，超越的であると共に内在的なものである。遠かった天国への距離がかくも接近したことは，意識の拡大の結果，超越的なものとして隔たった場所にあるものとしてしか天国を理解していなかった「私」が内在のものとして「天国」を再把握しなおしたことを意味する。キリストは自らを「わたしは門である。わたしを通って入る者は救われ」ると言い「門からでなく，ほかの所から乗り越えて来る者は盗人であり，強盗である。」と述べている。「門」を通らないことで，「私」は「流行遅れの服を着」たままであるのと同じく，キリストの贖罪死の信仰を拒絶したものであることを示している。しかし「お空のお父様」の助けで，「踏み越し段を越えて」入ることで，盗人や強盗ではなく，神に許された者であることを示す。この「踏み越し段」はまた「真珠」で出来ている。『ヨハネの黙示録』21章の新しいエルサレムの門も「真珠」で出来ている。そして「真珠」は「再生」のシンボルである。[20]「真珠の踏み越し段」を越えることは，即ち終末の死の後に，再生して楽園に入ることである。キリストの贖罪死を信じない信仰のまま，「私」は「天の御国」に入ることが許され，「私」にとって「楽園」が回復したことがここで示されている。

5

デイキンスンの No. 70 の詩, "'Arcturus' is his other name—" は, 短いが一つの一貫した語りを持っている。その語りの構造は, 「楽園の喪失」, 「終末」, 「楽園の復帰」である。ここで語られているのは, 人間の精神的成長・成熟の過程であり, 人として幼児の一体的現実が, 科学で表される識別的理性の拡大・増大によって崩壊し, 不安・動揺したものが, それが再び人格の中に統合され, 安定した心を持った成熟した大人に成長ことを示している。それはまた現代の女性の意識の拡大とそれに伴う伝統的な女性の社会的位置の変化が及ぼす調和した精神世界の崩壊とその回復を重ねたものである。それは更に, 小児で示されるロマン主義的な, 童話的な, 幻想的な, ブレーク的な, 超絶主義的な, 人と自然, 人と周囲との調和・安定した世界が, 科学とカルヴィン主義的ピューリタニズムの侵入によって, 崩壊した後に, 再びそれが, 「私」の人格の中で統合されたことを暗示する。最初の平安な精神が崩壊したことに対する不安と動揺, 崩壊させたものに対する嫌悪や苛立ちが, 終末と崩壊と言う試練を経て, 楽園の回復で平和と調和を取戻し, 完成した世界に入ったことを暗示するものである。

注

(1) この詩の引用と番号は, トマス・H・ジョンスンの三巻本 (1955) による。
尚この No. 70 の詩については, 1989年10月9日の武庫川女子大学の英文学会で「エミリ・ディキンスン——詩人の変容」と題した口頭発表の中で取り上げて分析を行ったことがある。この論文はその時の研究発表にその後の研究を加え基本的な構想を変えて発表するものである。

(2) Adalaide Morris, "'The Love of Thee a Prism Be': Men and Women in the Love Poetry of Emily Dickinson". *Feminist Critics Read Emily Dickinson*, ed. Suzanne Juhasz (Bloomington: Indiana UP, 1983), p. 111.

(3) Karl Keller, *The Only Kangaroo among the Beauty: Emily Dickinson and America* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1979), p. 70.

(4) Jane Donahue Eberwein, *Dickinson: Strategies of Limitation* (Amherst: University of Massachusetts, 1985), p. 56.

(5) Anand Rao Thota, (*Emily Dickinson: The Metaphysical Tradition* (New Delhi: Arnold—Heinemann, 1982), p. 117.

(6) E. Miller Budick, *Emily Dickinson and the Life of Language: A Stuty in Symbolic Poetics* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1985), p. 127.

(7) Jack L. Capps, *Emily Dickinson's Reading* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1966), p. 166.

(8) 旧約聖書『創世記』2章8節, 日本語聖書の引用は, 日本聖書協会の口語訳聖書による。英語の聖書の引用はAVによる。

(9) マーリオ・ヤコービ著 (松代洋一訳) 『楽園願望』 (紀伊国屋, 1988) p. 36.

(10) 例えば旧約聖書『イザヤ書』11章6～9節以下, 聖書の引用は, 日本聖書協会の口語訳聖書による。

(11) 新約聖書『ヨハネの黙示録』21・22章

(12) Ralph Waldo Emerson, "Nature". *Selections from Ralph Waldo Emerson* ed. Stephen E. Whicher (Boston: Houghton Mifflin, 1960), p. 23. 訳は斉藤光訳「自然」エマソン選集第1巻 (日

本教文社，1960）p. 48.

(13) マーリオ・ヤコービ　前掲書　p. 21.

(14) 例えば旧約聖書『詩篇』22篇6節

(15) E．ユング（笠原嘉・吉本千鶴子訳）『内なる異性——アニムスとアニマ』（海鳴社，1976）p. 11.

(16) E．ユング前掲書　p. 37.

(17) E．ユング前掲書 p.17.

(18) 旧約聖書『創世記』3章24節

(19) 新約聖書『ペテロの第二の手紙』3章9～13節

(20) この言葉は『マタイによる福音書』に33回出てくる以外は『ヨハネによる福音書』の3章5節の欄外の読み方に1回出るだけで，ある——『神学事典』（聖書図書刊行会，1972）による。

(21) 『ヨハネの黙示録』6章11，7章9，13，14節等

(22) 『ヨハネによる福音書』9章1節，10章9節

(23) ミリチア・エリアーデ（久米博訳）『聖なる空間と時間』（せりか書房，1985）p. 163.